

琉球大学学術リポジトリ

Risk factors for progressive sarcopenia 6 months after complete resection of lung cancer : What can thoracic surgeons do against sarcopenia?

メタデータ	言語: en 出版者: 琉球大学 公開日: 2020-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): Lung cancer, surgery, chronic obstructive pulmonary disease (COPD), gastric cancer, operation time 作成者: Nagata, Masashi, 永田, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46625

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Risk factors for progressive sarcopenia 6 months after complete resection of lung cancer: What can thoracic surgeons do against sarcopenia?

(肺癌完全切除術後6か月間でのサルコペニア進行の危険因子: 胸部外科医はサルコペニアに対して何ができるか?)

氏名

永田 仁



論文要旨

【背景と目的】骨格筋減少（サルコペニア）が様々な疾患で予後不良因子とされ、肺癌根治切除後でも術前サルコペニアが長期予後の不良因子と報告されている。我々は以前の論文（参考文献）で、肺癌術後6か月間でのサルコペニア進行は長期予後不良因子で、その関連は重喫煙者のみみられるとの報告を行った。予後改善を示すサルコペニアの治療法は確立されていないが、周術期のサルコペニア進行防止が予後を改善する可能性があり、胸部外科医が対策と実証を行うべきであるとした。今研究の目的は上記の相関を改めて多数の症例で検証し、長期予後との関連がある群で術後6か月間のサルコペニア進行の関連因子を検討しサルコペニア対策の参考とすることである。

【方法】2007年から2014年の間に神奈川県立がんセンターにて非小細胞肺癌に対して肺葉切除（二葉切除や肺全摘術を除く）を施行し、肉眼的病理学的に遺残のない完全

論文要旨

切除とされた1277例中、肺切除既往、術後半年間での死亡、肺癌再発、気管支断端瘻、間質性肺炎急性増悪症例を除き、かつ信頼あるデータの得られた1095例を対象とした後ろ向きコホート研究で行った。コンピューター断層撮影（CT）における第3腰椎レベル断層像での骨格筋断面積を身長²で除したSkeletal mass index（SMI）が全身骨格筋量と有意な相関があり、SMIの術前と術後6か月での変化量を評価し、1095例を性差とブリンクマン係数600以上と未満で4グループに分けてSMI変化量を含む臨床腫瘍病理学的因子および手術因子と術後6か月後以降の長期予後との関連を調べた。さらにSMI変化量と長期予後が有意な関連にある群でSMI変化量と有意な関連のある臨床腫瘍病理学因子および手術因子がないか検討した。

【結果】1095例の術後6か月後からの中央観察期間は55.9か月で3年、5年生存

論文要旨

率はそれぞれ 89.8% および 82.5% であった。術後 6 か月間の SMI 変化率の中央値は -3.4% であった。多変量解析で重喫煙者男性群（重喫煙者女性は症例少なく除外した。）で SMI 変化率は長期予後への有意な関連をみた。カットオフ値は -10% で重喫煙者男性 391 例における -10% 以下の SMI 減少の関連因子は他癌既往、1 秒量低下（カットオフ値 1890 ml）、手術時間延長（カットオフ値 200 分）であった。

【結語】今研究で術後 6 か月間のサルコペニアが重喫煙者の長期予後に関連があることが確認された。周術期サルコペニアの対策の手がかりとなる関連因子は得られたが、強力な対策につながるものには乏しく、周術期の栄養、リハビリなどの抗サルコペニア療法の長期予後への影響を調べる臨床試験の導入を含むさらなる調査を要し、かつその意義があると思われる。